

裾野麗峰山の会・山行報告書		文・井上	写真・井上、後藤
山番	NO. 2011-1		
日時	2023年3月11日(土) 晴れ		
山域	富士山・宝永山(約2710m・山岳スキー)		
コース	長泉 6:00-洞門トンネル北駐車 発 6:46-宝永第一火口分岐 11:54-宝永山三角点の少し北からスキー開始-スキー外す 14:00-駐車場着 14:30-長泉		
標高差	洞門トンネル北 1275m~宝永山分岐 2710m=1435m		
藪漕度	上り・下り なし		
難易度	非常に困難	レ <b>困難</b>	やや困難 普通 やや易しい 易しい
<b>宝永山からの初スキー</b>			
参加者	後藤、加藤、井上=3名		

雪があれば山スキー、雪がなければ登山と、2本立ての準備をした。御殿場までの道中から見る富士山は斜面の南側が見えるので雪が少なく見える。最近の大雨でなくなっているかもしれない。御殿場からキャンプ富士の方にくると、富士山の東側に雪がありそうだとわかった。それでも小富士はほぼ雪はなくなっていた。



洞門発

加藤さんに先に洞門に着いてもらい、駐車場所を確保してもらおう予定だったが、トンネルの南側の閉鎖された駐車場のさらに西にある道際のスペースにはすでに6台くらいの車が停まっていた。トンネルの東に2台並べて駐車。

スキーをザックに取付け、ヘルメットをかぶる。暖かくなったとはいえ、歩き始めはまだ寒く、持っている防寒用のものは全て身に着けている。加藤姉御(または麗峰の女帝)から「宝永山にいけるのは今日が最後かもね。行ってきな。」と言われたが、先週の北横

岳のダメージはまだ体から抜けておらず、今日は、お気楽スキーのつもりだった。

林の中は頭上の木の枝に担いだスキー板が何度もぶつかり、枝をよけながら歩く。林を抜けると地面には大雨でできたと思われる深い溝があり、その中はストックで刺しても割れないカチンカチンの硬い氷だった。少しずつ雪が現れる。体温が上昇し、Tシャツ一枚になる。最近のパターンで、後藤さんから「先行って」と言われ、ここから一人先行して登る。遠くの二ツ塚の上塚のコルから子供の声で「ヤッホー」が聞こえた。「ヤッホー」と返し、手を振りあった。



前方には、スキーで登っている単独の人と、さらにずっと上に2人いるように見える。この2人はなかなか移動しないので、人ではなく木の杭かと思ったが、非常にゆっくりと動いていた。とりあえず、この人たちよりは上に行きたいと思った。

二ツ塚を越え、宝永の赤岩を目標に進む。徐々に傾斜が強くなってくると、スキーブーツの裏についた雪で滑りやすくなったので、アイゼンを付けた。これで滑落の心配はかなり減る。雪の斜面は、凍って輝いているところと、やわらかい雪が残って風紋となっているところが交互になっている。

登りながら横目でこれを見て、この斜度とこの雪の状態で、自分のスキーの能力で下ることができるか不安になっていた。いろんなことが頭をよぎる。昨年4月に富士宮口道路の開通日にスキーをして転倒し手の指を切ったこと。10年位前に、今回と同じコースで

一人宝永を目指し 2250m で体力の限界が来て、休憩のために片膝を雪面についたら雪の下が凍っていて、膝を切っけてしまい下りのスキーが大変だったこと。昨年末に地元の若い男性が、おそらくこのコースを滑落し何日も発見されなかったこと。とにかく、今日は転ばないことが第一命題だ。絶対に怪我をしないこと。

スキーでうまく滑り下りる自信はなかったが、それよりも、10 年前に挑戦し断念した雪の宝永山に登りきることが目標だ。先行していたスキーヤーはシール歩行で大きく右に移動して見えなくなった。二人組は名古屋から遠征してきた男女だった。男性は数年前に心肥大を患ったとのことで、今もかなり苦しそうだ。



美しい山

洞門で駐車できなかつたので水ヶ塚に車を停めて、車道を歩き、朝 5 時からすでに 5 時間以上登っているそうだ（つまりこの時は 10 時ごろ）。一日は長いのでゆっくりと行けるところまで行くとのこと。

せっかく遠征してきたので、明日は三つ峠に登る予定という。いつもそうだが、富士山は、遠方からわざわざ来たいところなのだ。私達には裏山みたいな近所の山ですが。単独スキーヤーは遠くに左に進んでいた。かなり早い。自分より前方には誰もいなくなり、登りと下りの新しい足跡が一人分ずつあるので、ないよりましてこの足跡を踏んで少しでも歩きやすいところを狙うが、それでも何度も雪に沈む。



下・上塚（撮影・井上）

やがて、宝永の頂上から降りてくる人が現れた。一人目は単独の若い女性。スキーを担いでいるとすごいですねと言ってくれるので、これで少しは元気になれる。次は若い男性2人。この人たちとは、またあとでも会った。スキーヤーはいない。

宝永火口の縁は雪庇になっているので、登りやすそうな右側に進んだ。どんどん斜度はきつくなるが、あとわずかと思い、自分を奮い立たせた。火口の縁に上がるとそこは、いつもの分岐点だった。宝永山頂からだいぶん右に来ていた。宝永火口側は雲で真っ白だ。宝永山頂近くにスノーボーダーいたので、そこまで行くことにした。都留からきた34歳男性。スプリットボードが欲しいと言っていた。火口縁東側の急斜面の新雪を一気に下って行った。このあたりにほかに滑った跡はないので、第一号だろう。



加藤の滑降



宝永山（提供・井上）



2008/12/18

自分は、むり。こんなところに行けない。とりあえずスキー板を付けたところで、ザックにひっかけていたヤッケがないことに気が付いた。しまった、落としたようだ。宝永山頂近くからはとても滑り出せないなので、登ってきた縁を戻り、スキー板で歩く感触を確かめた。



2008/12/18

分岐に戻ると、ヤッケが落ちていたので拾うことができた。

ようやく滑り出すことにしたが、斜面のきつさと雪面の状態に、気後れする。まずはずるずるとトラバースの斜滑降。ボーゲンでターンするが、一瞬、真下に向かうだけで急加速する。慌てて片足を踏ん張り、スライドしながら回る。やばい。コントロール不能だ。風紋の場所はスキーの先端が雪にささりつんのめる。光っているところは凍っていて思わぬ加速する。どっちもターンが難しい。通った後に割れた表面の雪片が氷の上をカラカラと音を立てながら、止まることなく転がり斜面に消えていく。おーこわ。

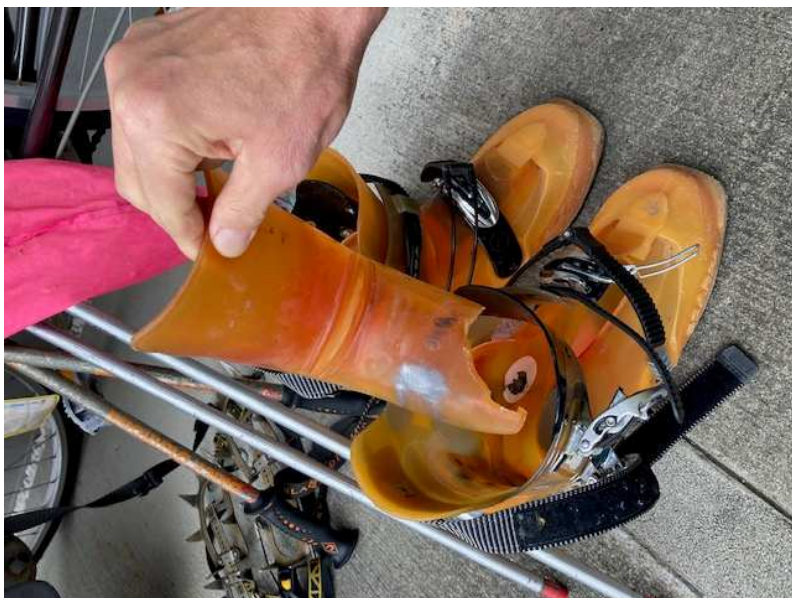
斜滑降してターンをする運動から、プルークボーゲンに変更し、連続できるターンを1回から3回、8回と増やしていき、スキーらしくなってきた。とても前傾になれず腰が引けたままなので、エッジが効きにくく思ったところで回れない。歩いて登っているときより汗をかき、息が切れた。

とにかく、とにかく転ばず無傷で下山したい。それだけを祈った。その時は、怖がってスキーができなかったと思っていたが、後で思えば、脚の疲れからスキーを操作できなかったような気がする。二ツ塚の方へ向かいトラバースしてきた道の方向へ戻る。この辺りまで来ると、斜面はゆるく楽だ。ちょっぴりシュテムターンやパラレルターンを楽しんだ。後は、二ツ塚にできたシュプールをトレースして戻るだけだ。転ばなくてよかった。

2時、雪がなくなりスキーを外した。先週に続き、頂上で休憩せず、昼ご飯を食べていないので腹が減り、ミニクリームパンを口に放り込んだ。後は歩いて下る。御殿場口駐車

場の方から男性一人が登ってきた。宝永直下ですれ違った2人組の一人のようだ。連れが体力がなくなり、スタート地点の水ヶ塚までいけないので、御殿場口入り口で待ってもらい、自分は二ツ塚から水ヶ塚に戻り車を取ってくるのだそうだ。

洞門につき駐車場所にたどり着くと、その友人がいた。元気そうなので良かった。自分は、しっかりと疲れた。スキーブーツから足を抜くのに苦勞した。スキーブーツは帰宅後洗っていたら、プラスチック部分が劣化でどんどん割れていった。登山行動中に壊れなくてよかった。その点では運がいい。



壊れたブーツ

下界に戻ると、自分が到達した宝永山山頂の場所とそこから雪のないところまでスキーで下ったところが見えて、誇らしく思えた。

その後、後藤さんは板妻の芹沢さん宅により、「大蛇（おろち）」という品種のメダカを2匹譲り受けた。まるで金魚のようなメダカ。バケツの中の「おろち」は泳ぐと胸びれと尾びれが、山本リンダの狙い撃ちの衣装のようにひらひらして見て飽きなかった。

今日も疲れた。でも達成感はハンパない。

以上

#### その他の記述（後藤）

1. 後藤・加藤は、標高約2000mまで上り、一本目の滑降。雪質が一番良かった。二本・三本目は、上塚山頂から滑降。気温上昇と共に雪は悪くなった。登山者は数名居たが、スキーは神奈川の2名のみ。三本目の滑降時、井上報告のボーダー滑降を上塚山頂から目撃した。
2. 富士山下部は今回で賞味期限切れ。今年も雪が少なく、年々、滑降は難しくなる。
3. 井上の壊れたブーツは元々、Nが使っていたモノ。昔の写真で調べたら、1994年ころのモノ。考えてみれば、随分、持つものである。
4. 宝永山滑降は、2008/12/18、2012/11/25に滑った。昔は、12月でも十分滑れた。
5. 宝永山滑降最高記録は、2001/02/03、後藤・加藤・渡辺・長岡。標高約1050mの青年の家から標高差1600mを5時間40分で上り、宝永山着12時40分。滑降は周遊道も滑り、青年の家着14時20分だった。生涯記憶に残る超弩級スキーだった。

<http://susono-reihou.babyblue.jp/946>